さして重要でない一日

ii naoyuki
伊井直行

さして重要でない一日

伊井直行

さして重要でない一日

一九八九年九月一八日　第一刷発行
一九八九年一二月二〇日　第二刷発行

著者——伊井直行
© Naoyuki Ii 1989, Printed in Japan

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一　郵便番号一一二　電話東京〇三—九四五—一一一一（大代表）
印刷所——信毎書籍印刷株式会社　製本所——株式会社大進堂
定価——一二〇〇円（本体一一六五円）
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第一出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-204560-5　（文1）

目次

さして重要でない一日　5
パパの伝説　95
あとがき　228

装幀　原研哉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

さして重要でない一日

さして重要でない一日

彼は固い木製のカウンターに片肘をついて眠っていた。昨日でもいいし今日でもいいし、何なら明日だって構わない、そんな一日の終わりに、彼はありふれた会話を交わし（「最近、疲れてるんじゃありませんか？」「しょうがないです。時間がないんですよ。全然、時間が……」）、いつの間にか眠りこける。〈ののまどや〉のカウンターでそんなことをして許されるのは、恐らく彼だけだ。そのポーズは、時に客や店でアルバイトをする女の子の気を引く役に立たないものでもなかった。

彼は目覚めようとしている。夢の中で、長く眠りすぎたように感じていた。いつも彼を心地よく目覚めさせてくれるカナリアの声が聞こえて来ない。あのカナリアは、とっくに南の空をさして飛んで帰ってしまったのだったか……。

彼はカウンターから顔を上げた。
「ねえ、高橋さん。オルゴールのカナリア、どこに隠したんですか?」
高橋さんと呼ばれた男は、カウンターの内側でグラスを拭きながら、唇の端に少しだけ笑みを浮かべる。
「隠したわけじゃありません。壊れたので修理に出してます」
「ずいぶん長いじゃないですか」
「古いんで合う部品がないんですよ。で、歯車の一個から作らなくちゃならないんです」
彼は、もう一度カウンターに突っ伏す前に、時間を尋ねた。
「え、二時。帰らなくちゃ」
彼はしっかりした足取りで店を出ていく。駅に向かってどんどん歩いた。駅前には、タクシーを待つ人たちが長い列をつくっている。はしゃぐ人はいない。最後尾につく彼に聞こえるように、もう二十分、一台も来ないのだと呟く人がいた。
コートの前を合わせながら、彼は、自分が少しも酔っていないのを確認した。それでも、ついさっきまでいた店が果たして〈ののまどや〉だったかどうか確信を持てない。〈ののまどや〉では、どんな馴染み客も午前零時になると追い出される。それ以後店の扉が開けられることはない。午前二時まで店にいるなんて、決してありえないことだ。カウンターの中に高橋さんがいて、オルゴールのカナリアを修理中で、彼につけで飲ませてくれる〈ののまどや〉でな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

い別の店の存在について彼は考え始めた。

二十分後、彼はタクシーの中にいた。彼が列についた途端、東京中のタクシーがいちどきに渋谷駅を目指して集まって来たのに違いない。まだツキが全部逃げ出したわけではないようだ、と彼は思った。

午前八時十分。K公園駅。いつもより正確に二十分遅い。多分、九時前ぎりぎりに会社につくことになる。

いつも彼は高架下の通路の半分を大股の八歩で横切る。その間に上着の内ポケットから定期を取り出し、体をそらすようにして改札口を通り抜け、階段を駆け上る。

二十分の違いは、この駅を彼に馴染みのない場所に思わせた。朝の通勤風景には違いないが、どこか緩んだものに感じられる。改札口に到達する前に彼の足が止まった。女の子たちの悲鳴が聞こえる気がした。切符売り場の前を三人の女の子が走っていく。一様に肩の下まで髪をのばした、短大の学生か勤め始めて間もないOLというところ。悲鳴は半ばの本気でしかなく、全力で走っているわけでもなかった。彼女たちの後ろで一人の少女が傘を振りあげていた(雨が降りそうな天気ではないのに)。太めで大柄の体を紺色の中学校の制服に包み、短い髪が顔を余計に大きく見せている。声を出さず、怒っているのか楽しんで笑っているのか判断のつかない表情。三人が、歩いて追いかけて来る少女を引き離して距離を取ると、少女は、突然、

近くにいたセーラー服の女子高生の方に向き直った。女子高生は、百パーセント本気の悲鳴を上げて逃げ出した。傘を持った少女は深追いをしない。駅を出て、ときどき後ろを振り返りながら、横断歩道を渡っていった。三人の女の子は、バス乗り場で「こわい」「こわかったね」と笑いながら言葉を交わしている。少女はK公園近くの養護学校の生徒なのかもしれない、と彼は考えた。どちらが被害者だったのだろう、とも。

構内に立ち止まっている人は、この騒ぎを注視していたが、電車に乗ろうと急ぐ通勤客は、殆どが一瞥をくれただけで目をそらした。きっと、この時間のK公園駅では、お馴染みの光景なのだ。彼が歩き始める。会社に着くのは恐らく九時五、六分。タイム・カードはないから、大して気にする必要はないのだが、いい気持ちのものではなかった。特に、今朝は。

発車のベルが間もなく鳴りやむ。彼は、閉まり始めたドアの向こうに割り込んでいった。知らない顔ばかりだ。もっとも、いつもの時間、いつもの電車で、お馴染みの顔に出会ったからといって、朝の挨拶や会話が交わされることはない。だれもが知っているように。

その日、彼が最初に発した言葉は「なんだ」だった。

「おい、遅刻だぞ」

「なんだ、お前か」

「お前も走れよ」

「……」

彼のその朝六本目の電話。
「どちらの佐藤さんですか？」と電話を取った女が言う。
「人間のサトーだよ」と彼は答えた。
「え？」
「なめても甘くない、人間の方のサトー」
「なんだ、佐藤君か。朝からつまらないシャレ。体の調子でも悪いんじゃない？」
「機嫌が悪いだけ」
「へえ。で、課長に何か用事？」
「もう出ちゃったの？」
「九時になると同時に」
「何時に戻る？」
「四時から会議なんでしょ。それまでには戻るって」
「あのさ、その机の上に、厚めのコピーの束、置いてない？」
「え？　うん、あるよ。これ、佐藤君が作ったの？」
「そう。八ページから先、ページがばらばらになってるだろ？」
「あ、ほんとだ。どうしちゃったの？」

「機械がいかれてた、俺はそれに気づかなかった、読みやすいようにと思って綴じてあげた、確認しないまま昨日の夜のうちに配った、飲み屋の椅子に座ったら嫌な予感がして来た、自分の分のコピーを開いてみた。御覧のとおり」
「脱落してるページがあるみたい」
「鋭い観察。それなのに、コピーの原本がどこかに行方不明でね。俺の手元にあるのも不完全版」
「ということは……」
「いま、コピーを配った先に、原本が行ってないかどうか聞いてるの。で、ついでに謝って、ページを直してくださいって頼むわけ」
「回収して、自分で直すべきなんじゃない」
「厳しいな。時間がないんだ。二十部以上あるし、俺も十時には出なくちゃならない」
「出なきゃいいじゃない」
「外に出るのが、俺の仕事なの」
「わたしは駄目よ。今日は忙しいから」
「ええっ？　君の課長の分だけやってくれればいいんだから……」
「いや」
「頼む」

「駄目。わたし、佐藤君嫌い」
「本当？」
「ええ」
「初耳だな。それなら頼まない」
「そうして」
「断わられたの、君が初めてだ」
「最後だといいけど」
「はあん？」
「コピー、すぐ分かるところに置いといたげる」
「そりゃどうも、ありがとう」

電話の間に、彼の課長が席に戻っていた。受話器を置くのを待ちかねたように彼の名前を呼んだ。片手にコピーの束を持って。彼がまだ回収し損ねているコピーの一部を、部長だか誰だかからもらい下げて来たらしい。彼のほかに一人だけ残っていた男子課員、今年入ったばかりの山本君が「行ってきまーす」と言って部屋を出ていった。異変を察知した女の子1、女の子2、女の子3が、机に向かったまま聞き耳を立てる。おばさんAが課長席を見る。おばさんBは、いつものとおりの無関心。

彼は、課長の机の前に立った。

営業一部第三課の中で、彼と山本君とは話が合うと思われている。二十代の男子課員は、彼らふたりだけだからだ。しかし、彼は年が明けると三十歳になってしまう。山本君は、いかにも今時の新入社員風の服装なんかしないし、年上の人々の神経を逆なですることを言わないように気を遣っているのだが、それでも「若い奴の考えてることはサッパリ分からん」と言われてしまう。彼の方は、そんな風に言われる時期が終わりに近づき、年上の人たちに仲間のひとりと認められそうになったとき、「突飛な」行動をとって、仲間入りを無期延期されてしまった。彼は、「私用」とだけ書いた有給休暇届けを提出し、九日間会社を休んだ。末っ子の妹が死んで、その通夜から初七日まで田舎に帰っていたのだが、その事情が会社の知るところとなり、会社からの香典は受け取ったものの、「年休」を「忌引き」に振り替えるようにという、毎年七割から八割の年休を消化している彼にすれば嬉しくない筈のない申し出を、理由を明らかにしないまま、拒否し通した。彼が明らかにしなかった理由は、会社の人間と妹の死について話したくなかったというだけのことで、ほかには何もない。

ふたりに共通点はあった。足が臭わないことだ。山本君は靴の内底に脱臭剤入りの下敷きを敷き、なお靴を脱いで上がる場所によばれる事態に備えて、ロッカーに替えの靴下を用意している。彼の場合は単に体質だ。滅多にないことだが、一日の仕事を終え、同僚と料理屋の座敷に上がり込むために革靴を脱ぐとき、彼と山本君は、同僚の化繊の靴下にくるまれた足と、詰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com